

日本放射化学会第 67 回討論会 (2023) 印象記

中島 覚

Nakashima Satoru

日本放射化学会第 67 回討論会 (2023) が、2023 年 9 月 21~23 日の日程で、広島大学東広島キャンパスのサタケメモリアルホールと学士会館で開催された。筆者は実行委員長を拝命した。印象記は参加者によるものをイメージするが、主催者側がどのように準備をして開催し、何を考えたかも読者の参考になろう。

2020 年と 2021 年はコロナ禍で、オンラインで討論会を開催していただいた。コロナ禍での開催は大変であったと推測するが、学位取得を目指す学生にとって大変ありがたかった。オンラインでの会議等は最初不慣れであったが、いつの間にか慣れて大変便利であると感じるようになった。それでも 2022 年度東京大学により第 66 回討論会を対面とオンラインのハイブリッドで開催いただき、多くの研究者から直接刺激をいただけて対面の良さを改めて感じた。2022 年度の状況では懇親会の開催は無理であったが、今回は懇親会もぜひ開催し、コロナ禍の終了を宣言する討論会にしたいと思った。

これまで 1965 年 (第 9 回)、1989 年 (第 33 回)、2008 年 (第 52 回) の討論会を広島大学で開催し、今回で本学での開催は 4 度目である。退職前に討論会のお世話をすることも意味があると考え、また、将来的にも放射化学討論会をお世話できる広島大学であってほしいという思いもあった。

広島大学ではこれまで分析化学の講座、無機化学の講座、自然科学研究支援開発センターがそれぞれ中心になって開催しており、放射化学の多様性を感じさせる。放射化学という学問は、化学という学問分野の中でも他の分野との境界領域に展開していく印象が強い。



写真 討論会 HP の表紙(写真は広島大学広報グループ提供)

以前本学会には 4 つの分科会があった。それが、理事会等のご努力により、その他 (境界分野への放射化学の新展開等) を入れて 8 部会となったことは意義深い。まさにいろいろな分野へ打って出ている印象を持つ。多くの部会の中で特に教育部会は積極的に活動しており、昼食時の部会総会での講演から討論会の教育セッションへスムーズにつないでいた。また、1 日目の昼の時間に開催された若手の会では、自分たちでお弁当も用意し、積極的に活動されていた。大変心強い。

これまでも現地実行委員会 (LOC) と理事会は連携を取って討論会を開催してきたが、今回はその連携がより強くなったと感じた。これは LOC の準備が大変なので理事会が積極的にサポートするようになったためであると理解している。理事会のメンバーから多大な支援をいただいたが、LOC 中での調整、理事会のそれぞれの担当 (討論会、若手賞、総務等の担当) との調整等は、当然それぞれに対応しなければならないことではあるが、少し大変であ

るとも感じた。

特別講演は3件お願いした。羽場宏光先生(理研)からは「新元素の核化学」を特別講演いただいた。筆者は長い間d軌道が関与する化学を進めてきた。最近ではf軌道が関与する化学も進めている。更にその先にg軌道が関与する化学もあると伺い、化学の可能性、放射化学のすばらしさを感じた。

五十嵐康人先生(京大)には「原爆による「黒い雨」領域推定のための基礎的研究」を特別講演いただいた。厚生労働省からの受託により進められている1945年の広島・長崎への原爆投下による放射性降下物の沈着地域の正確な推定のための基礎的研究に関して、お話しいただける範囲内で講演いただいた。多くの方が関与されているお仕事で、また広島ならではの講演で、ありがたかった。

片田元己先生(都立大)には「佐野博敏先生を偲ぶ」を特別講演いただいた。佐野先生の研究業績と共に先生の「人となり」についてもご紹介いただき、先生を偲んだ。筆者自身は佐野研の出身でメスバウアー分光法を用いて錯体化学の研究を進めてきた。その後、放射線安全管理を行うようになり、福島事故以降は福島復興に関係するテーマでも研究してきた。更に、これまでの物質研究と環境研究を融合したような展開も行っている。大きくテーマを変えたと思っているが、佐野研、遡って木村健二郎研究室、更に遡れば柴田雄次先生の研究の流れの中で遊んでいるのにすぎないとも感じた。

三浦勉先生(産総研)に特別セッション「新試験研究炉計画」を企画いただいた。JAEA, 京都大学, 福井大学が選定されて概念設計等を進めているが、それぞれの担当者から報告があった。本討論会の幅を広げていただいた特別セッションであった。

一般発表は、15分間の発表、5分間の質疑応答を堅持した。研究内容を丁寧に説明し、長い質疑応答に耐えるというのが討論会の基本であり、討論会で一番大事なところである。

ポスター発表は2日間に分けて行った。会場では大変活発な議論が行われていた。ポスター掲示は両日ともお願いした。ポスター発表の時間だけでなく、時間が空いたときに見ておられた方もいた。また、フラッシュトークは前年に続いて今回も行った。若い方のフラッシュトークも良いが、年配の先生も頑張っておられる姿は、定年が近い筆者にも勇気をい

ただいた。

総会は、一般的には議事を粛々とこなす。本学会の総会の特徴は、承認すべきことは承認した後、若手支援について参加者全員でディスカッションすることにあった。他の多くの学協会の総会とは異なる。理事会の若手支援への強い思いを感じた。

総会終了後、奨励賞が大内和希氏(JAEA)に授与され、「アクチノイドの溶液内複合反応研究と微量分析法開発」の講演があった。

懇親会を開催できたことも良かった。日常が戻ったことを感じた。会場を探す際、ホテルによってはコロナ禍の影響を受けて宴会を行わなくなったところもあり、東広島市のような小さな町の苦労を感じた。幸い、ラッセレ東広島を予約することができ、参加者に楽しんでいただけた。交通が不便なため、バスの予約等が大変であった。

参加されている方に伺ったが、若い人が多いという印象を持たれたようである。安全管理関係の大会に比べると確かに若い人が多い。しかしながら、学生が多く発表する日本化学会での発表はいつもこうである。若い人はいるところにはいる。「大学での人材育成」と「社会で要求される人材」との乖離をどのように埋めるかが課題となる。放射化学会会員で放射線管理も行われている方も多く、大学で基本的な人材育成をしていれば、安全管理も行える人材となることが期待される。大学は専門学校ではないので、どんなキャリアパスを進むにあたっても対応できる人材の育成が大事である。

閉会時に発表者の中から6名(重河優大さん(理研), 床井健運さん(阪大), 田村彩乃さん(都立大), 板倉悠大さん(阪大), 風間裕行さん(JAEA), 住吉剛さん(中央大))の方が若手優秀賞を受賞された。学会の閉会式では受賞者が不在のことが度々あるが、今回、受賞者全員が最後まで残ってくれていた。モチベーションが高い若手が多いと感じた。受賞される方は今後もこの分野で活躍される可能性が高く、本学会を牽引される人材に成長されることを期待する。

今回は矢永誠人先生を実行委員長として静岡大学で開催される予定である。盛会を期待する。

(広島大学自然科学研究支援開発センター)